発達障害傾向の特性を持つ母親に関する育児や家事の現状と課題の明確化

―発達障害傾向の母親への育児期における支援方法確立に向けて―

金澤　悠喜[1) 2)]，菅谷　智一[3)]，山崎　真依[4)]

1）慶應義塾大学看護医療学部，2）筑波大学客員研究員，3）筑波大学医学医療系，4）筑波大学附属病院

＜要　旨＞

発達障害傾向の母親への支援を確立するために、育児期の発達障害傾向の特性を持つ母親に関する育児や家事の現状と対処方法を明確化することを目的とした。第１研究は、インタビュー調査を１名行い、第２研究は、WEB 調査を母親 300 名に実施した。項目は、AQ-Japanese（日本語版）Revised、その特性に合わせた対処および自由記述の独自の質問項目を作成した。分析は、記述統計を行った。研究２の発達障害の特性があると感じている母親は、「社交的な（ママ友などと接する）状況や場面でも緊張する」、「新しい場面（状況）では不安を感じやすい」などが多かった。研究１の母親も、“ママ友と集まるときには、気をつかってしまい、疲れてしまう”と語られていた。発達障害の特性があると感じている者は、育児や家事をスムーズに行うには、遠回りしてでも「やるべきことを目に見える形でメモやチェックリストを作成すること」で、他のことが気になっても決まりに合わせて対処をしていることが明らかとなった。

＜キーワード＞

発達障害、グレーゾーン、育児期、母親、育児支援

【はじめに】

発達障害は、診断をつけにくく、グレーゾーンと言われる者が多くいる。子どもに関しては、発達障害傾向の特性を持つ場合には、周囲の大人（保育所・幼稚園・各学校などを含む）が支援を行い、子ども達を生活しやすい方向へ導くことや、その子どもを育てる両親への支援の充実化が図られている（厚生労働省，2020）。しかし、発達障害傾向の特性を持つ母親は、妊娠するまで、支援されるルートから外れ、個々で工夫し、社会生活を送っている。つまり、妊娠するまで、自分自身の事だけであれば、周囲からも問題視されずに生活できている（星野，2016）。ところが、出産後は子どもを中心に考え、育児や家事を行う必要が出てくる。発達障害傾向の特性を持つ母親を出産直後から支援する助産師は、その母親の特性をふまえて、個々に合わせた育児や家事の工夫を指導し対応している。その指導は、各助産師に委ねられ、支援の統一やエビデンスに基づいた支援は行われていない（山崎他，2023）。その上、産科、精神科、保健センター、助産院などの施設が連携した支援は殆ど行われていない（Kanazawa, et al., 2021）。そこで、発達障害傾向の母親への支援を確立するために、本研究では、育児期の発達障害傾向の特性を持つ母親に関する育児や家事の現状と対処方法を明確化することを目的とした。第１研究として、インタビュー調査を行い、第２研究として、アンケート調査を実施した。育児期は、出産後から児が２歳未満までと定義した。

【方法】

１．研究デザイン

研究１は、インタビュー調査を用いた質的帰納的研究であった。研究２は、WEB 調査を用いた横断研究であった。

２．研究対象者

１）研究１：インタビュー調査

第１子が２歳未満の母親のアンケート回答者８名の内、インタビュー協力者１名であった。

２）研究２：WEB 調査

末子が２歳未満かつ発達障害傾向の特性があると認識している母親 300 名であった。発達障害傾向の判断は困難であるため、母親の特性として、AQ-Japanese（日本語版）の項目に１項目以上あてはまる者を対象とした。

３．データ収集

１）研究１：インタビュー調査

社会福祉法人関連保育園３施設にポスターの掲示を行い、2 歳児未満のクラスの保護者宛にチラシの配布を保育士より行った。同意およびアンケートフォームに回答後、メールアドレスを送ってもらいインタビューの日程調整を行った。インタビュー内容は、アンケフォームの特性に合わせて、育児や家事の困りごとやその対処方法について語って頂いた。インタビュー時間は、60 分であった。

２）研究２：WEB 調査

（株）クロス・マーケティングに調査を委託した。（株）クロス・マーケティングは、モニター管理会社（株）リサーチパネルの保有するモニターに対して調査を実施した。登録者は、女性 58%、20～40 代 63%の約 465 万人であった（2021 年実績）。

４．アンケート

１）研究１：インタビュー調査

アンケートは、母親の特性の判断として、成人期 ASD 検査女性版、成人期 ADHD 検査女性版を使用した（福西，2021）。

２）研究２：WEB 調査

調査項目は、AQ-Japanese（日本語版）Revised：50 項目 4 件法と、その特性に合わせた対処および自由記述の独自の質問項目を作成した。AQ-Japanese（日本語版）の特性に合わせた工夫や対処は、書籍（高橋他，2016／原田他，2015）や先行論文（Kanazawa, et al., 2021／山崎他，2023）を参考とした。アンケート作成は、発達障害研究に精通した大学教員、臨床の精神科看護師、アドバンス助産師からの意見を得た。

５．分析方法

１）研究１：インタビュー調査

アンケートは、記述統計を行った。インタビュー内容は、逐語録化し、1 名であったため、特性に合わせて困りごとおよびその対処を分析した。

２）研究２：WEB 調査

AQ-Japanese（日本語版）は、記述統計を行った。AQ-Japanese（日本語版）の回答に連動している独自の質問項目である対処に関しては、記述統計および特性に合わせた対処行動を分類した。

６．研究期間

2022 年 12 月 19 日～2023 年 4 月 8 日

７．倫理的配慮

１）研究１：インタビュー調査

インタビュー時は、プライバシーが保護される個室で実施した。インタビュー内容は、Zoom の録音機能を用いて保存した。本研究は、所属先の倫理審査委員会の承認を得た（第 1822－1 号，令和 5 月 3 月 23 日付）。

２）研究２：WEB 調査

本研究はWEBアンケートであり、研究者は個人を特定できる情報を取得しなかった。AQ-Japanese（日本語版）の使用許可は、株式会社三京房の許可を得た。本研究は、所属先の倫理審査委員会の承認を得た（第1858号，令和5年3月23日付）。

【結果】

１．研究１：インタビュー調査

１）研究参加者の属性

アンケート回答者の平均年齢は、31.7歳であった（n=8）。インタビュー協力者は、20歳代であった（n=1）。

２）分析結果

参加者のADHD尺度平均は39.6点、ASD尺度平均40.7点であった（n=8）。インタビューでは、育児や家事の優先順位がつけられないことや、ママ友との関係に気遣いすぎてしまう現状に対して、夫の理解やサポートが妻を支えていた。

２．研究２：WEB調査

１）研究参加者の属性

研究参加者の平均年齢は、30.8歳（n=300）であり、パートナー（配偶者）のいる方が93.7%（n=281）であった。勤務状況は、専業主婦36.0%（n=108）、会社勤務31.0%（n=93）が多かった。AQ-Japaneseの得点は、32点以下97.5%（n=287）、33点以上4.3%（n=13）であった（カットオフ値33点）。

２）分析結果

「同じことを何度もくりかえすことが好きである」が多く（69.0%，n=207）、できない場面になったときには、一時的に我慢して、ひと段落した後に行うようにして対処していた方が多かった（57.0%，n=118）。また、「社交的な（ママ友などと接する）状況や場面でも緊張する」も多く（69.0%，n=207）、緊張した時の対処方法は、不自然ではない頻度で視線を合わせるようにしていることが多かった（42.5%，n=88）。次に、「新しい場面（状況）では不安を感じやすい」が多く（68.0%，n=204）、対処方法の多くは、段階的にできることを増やすようにしていた（44.1%，n=99）。さらに、「他の人は気がつかないような細かいことに気づくことが多いと感じている」も過半数を超え（60.7%，n=182）、やるべきことを目に見える形でメモやチェックリストを作成することで多くが対処していた（60.4%，n=110）。

【考察】

健常者の3%弱（大学生2.8%、社会人2.6%）が自閉症スペクトラム症において障害レベルとして判断する手がかりの１つになるとされている（若林他，2004）。研究２の対象者は、4.3%がAQカットオフを超えており、先行研究の対象者の割合とほぼ同様であると考えられた。

研究２では、AQ-Japaneseの特性があると感じている母親は、「同じことを何度もくりかえすことが好き」や「社交的な（ママ友などと接する）状況や場面でも緊張する」、「新しい場面（状況）では不安を感じやすい」、「他の人は気がつかないような細かいことに気づくことが多いと感じている」が多かった。研究１の対象者も、“ママ友と集まるときには、気をつかってしまい、疲れてしまう”と語られていた。子育てを開始すると、苦手であっても人と関わることが増え、子どものために苦手なことに挑戦する必要が出てくる（星川，2016）。本研究の母親も、我慢することや、少しずつ段階を踏んで努力していることが示された。

また、本研究の対象者は、発達障害と診断された方ではなく、発達障害の特性があるかもしれないと感じている場合がある。発達障害の特性があ

ると感じている者は、育児や家事がスムーズに行えるには、遠回りしてでも「やるべきことを目に見える形でメモやチェックリストを作成すること」で、他のことが気になっても優先順位に合わせて育児や家事を行うという対処をしていることが明らかとなった。支援者は、発達障害の特性を持っていそうと感じる方には、子育てが始まる初期の段階から、これまでの子どものいない生活に育児をどのように取り入れていくことが、生きにくさや子育てしにくさを軽減できるかを母親たちと共に考え、支援していく必要があると考えられる。また、発達障害の特性を持っているかもしれないと感じている母親たち自身が、躊躇せずに支援者に相談できる子育てしやすい環境を、提供できるようにすることも必要であると言える。

【研究の限界および今後の課題】

研究１では、本調査を回答する者が、発達障害の傾向があるかもしれないと感じ、その対処をどのようにしているのか、もしくはできていないのかを明確にしたものである。研究２では、AQ-Japanese（日本語版）の項目に１項目以上あてはまる者を対象とし、33 点以上の発達障害の可能性のある者が発達障害の診断を受けているかも定かではない。したがって、発達障害の傾向の定義が曖昧であったことは、研究の限界と言えるだろう。しかし、発達障害を診断することは非常に難しく、特に傾向があるにも関わらず、診断がつかない者も多いことから、発達障害かもしれないと思いながら育児や家事を行い対処している方の結果は、意味のあるものであったと考えられる。実際に、支援者も発達障害の傾向があると感じながらも、受診を勧められず、もしくは、診断まではつかずに育児や家事に困りごとを抱えている現状がある。今後は、各疾患の分類や発達障害の傾向の定義を明確にし、調査を進めていきたい。

【結論】

発達障害の傾向があると感じる母親は、育児や家事を行うために、自分なりの対処および具体的な対処方法が示唆された。

（本研究に利益相反関係はない。）

（本研究は、公益財団法人　明治安田こころの健康財団　第 58 回（2022 年度）研究助成により行われました。感謝申し上げます。）

（参考文献）

Kanazawa, Y., Yamazaki, M. (2021). Survey of Support for Pregnant and Puerperal Women with Developmental Disabilities. Journal of Maternity Care and Reproductive Health, 4(3), 257-268.

クロスマーケティング．https://www.cross-m.co.jp/company/policy.html

厚生労働省.（2020）. 発達障害者関係の調査研究. https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/hattatsu/gaiyo_00001.html　（アクセス日：2022/4/7）

高橋三郎（2016）DSM-５ガイドブック 診断基準を使いこなすための指針，医学書院.

原田誠一（2015）メンタルクリニックでの主要な精神疾患への対応［１］発達障害，児童・思春期，てんかん，睡眠障害，認知症，中山書店.

星野仁彦（2016）発達障害に気づかない母親たち，株式会社 PHP 研究所，東京，pp2-3.

山崎真依，金澤悠喜，川野亜津子.（2023）自閉症スペクトラムと類似した特性を持つ妊産褥婦に対する助産師の支援，母性衛生.（2022/9/15 採択）

福西勇夫（2021）成人期 ASD 検査女性版マニュアル，千葉テストセンター，東京.

福西勇夫（2021）成人期 ADHD 検査女性版マニュアル，千葉テストセンター，東京.